

えきまえじょうかく
神戸高速・花隈駅



写真1 現在の花隈公園（南より）



赤枠が花熊城の推定域（上がほぼ北）

はなくま
花熊城 (神戸市)

「姫路城400祭」のイベントが佳境です。メインは「池田輝政展」。しかし、肝心の輝政と直接関係を示す史料は非常に少なく、展示担当者の苦勞がしのべれます。輝政に関する史料は少なく、姫路築城の“プロデューサー”としてその名は知られていますが、事績の裏づけやどんな人物だったかは意外に認知されていません。そのため、彼に対する過大評価や大雑把な話も時々耳にします。なかなか輝政の人物像にまで迫れる良質な新出史料もありません。ここでは、彼と関係のある城郭遺跡をとり上げてみます。

姫路から神戸方面に通勤・通学する人は多く、そういう人には見慣れた風景の一つでしょう。JR神戸線神戸駅を過ぎると元町駅の手前、山側に城郭石垣風の構造物が視界に飛び込んできます（写真1）。現在は「花隈公園」となっていて、地下は駐車場となっています。この公園が中世の花熊城のあった場所に含まれているとみられます。この城は、織田信長が兵庫湊を押さえている毛利勢や雑賀衆に対抗するため、有岡城の荒木氏に築かせたとも言われています。荒木氏が信長に反旗を翻すと、池田恒興（輝政の父）にこの城の攻撃を命じました。この時の戦闘に輝政とその兄元助も参戦しています。花熊攻めの功績によって池田恒興は摂津に所領を与えられ、摂津衆の一翼を担うことになります。輝政が中川清秀（茨城城主）の娘を娶るのもその関係からでしょう。大坂本願寺の跡に築かれた大坂城は秀吉が入城するまで、恒興の持城となりました。

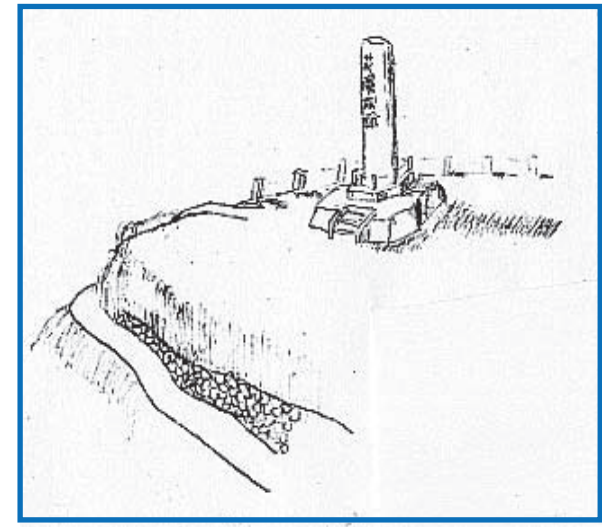


図1 花隈公園建設前のスケッチ（藤平光一氏による）

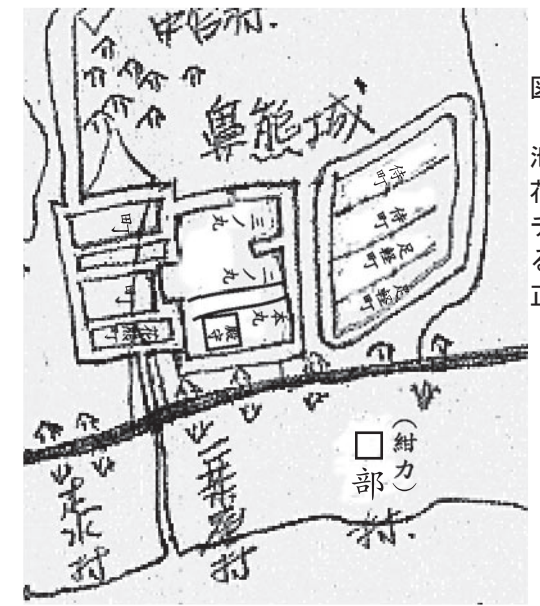


図2 池田文庫所蔵絵図の花熊城部分のスケッチ（藤平光一氏による）を一部加筆・修正

花熊城は現地形などから推定して、海食崖を利用して築かれたのでしょうか。西側及び南（海）側はその崖を天然の要害とし、その裾部を西国街道が通じていたと思われます。海と陸地の狭隘部にこの城は位置しています。荒木村重と対峙した織田勢は、荒木勢の籠る花熊城を山手側に大きく迂回して兵庫湊に乱入しています（『信長記』）。西国街道と兵庫湊を押さえるための城だったとみて間違いないでしょう。現在では大都市の中心地域にあって、かつての姿を偲ぶことすら難しくなっています。岡山大学池田文庫所蔵の絵図をみると、城と町が堀を介しながらも一体的に描かれ、その東には谷が堀切の役割を担い、「侍町」「足軽町」のあることがわかります。「花熊町」では街路や家屋が描写されているのに対して、「侍町」「足軽町」ではそうした描写が無いのが気になります。中世的な城下町のあり方を考える上で示唆的な描写かもしれません。



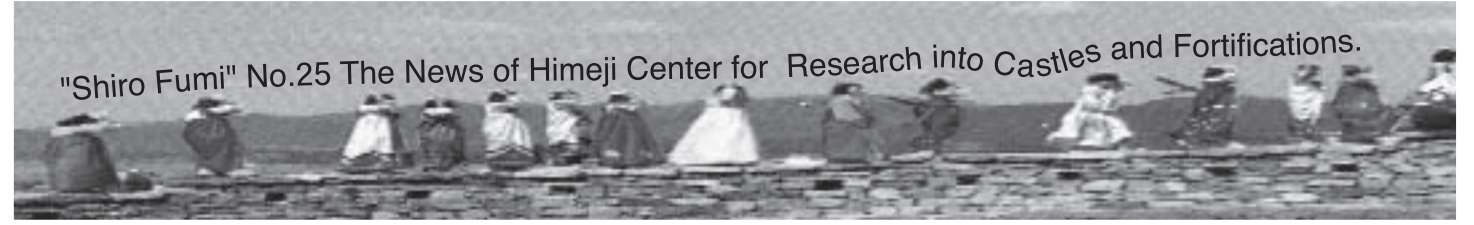
写真2 福徳寺境内の供養塔

花熊城に由来するものかどうかは別にして、花隈公園が建設される以前、図1のように石碑の下に石積みと犬走り状の平坦面が一部きれいに残っていたそうです（藤平光一『摂津古城考』私家版、1950）。公園附近の工事で200個以上の石塔や一石五輪塔の破片などが出土したといわれており、一部が福徳寺境内に置かれています（1969年安置、写真2）。これらの遺物がどのような形で花熊城に関係していたのかは不明です。福徳寺は花熊城の殿守跡と言われています。

多淵敏樹『花隈城跡』（神戸市教育委員会、1969）によると、城の「遺構の存在は、ほとんど考えられないから、発掘調査は行わず」「又工事による土取が始まってからも、城の遺構の検出はできなかった」とする。しかし一方で、昭和26年くらいに付近の料亭建築工事中に方形の石塔ばかりが出土し、その後、火輪部や笠部など三角形、球形の部分ばかりが元町通り4丁目付近で出土していたという（『花隈』花隈町新興会、1971）。文化財調査報告書よりも、花柳界の会誌の方が興味深い情報を提供してくれる。



写真3 花隈公園東側の谷の現況



"Shiro Fumi" No.25 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.